

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 太宰治 『姥捨』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

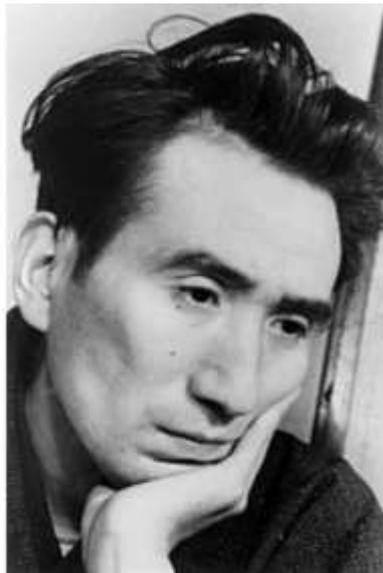
『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

太宰治

『姥捨』



第 279 回のツイキャス読書会の課題図書は、太宰治の『姥捨』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

[青空文庫 太宰治 『姥捨』](#)

[朗読しました。](#)

生まれ変わっても

だれそれが情死した、というニュースもほとんど聞かれなくなって久しい。現代の夫婦関係がそれだけドライなものに変化しているのかも知れない。

今回の作品では、かず枝が不義理を働いたとの書き出しになっているが、具体的なエピソードはないため、夫婦のうちどちらが悪いかはよくわからない。

だが、私には嘉七のほうがより悪いように感じた。かず枝のことを慮って睡眠薬の量を減らしたりしていたが、それは万が一生き残ってしまったとき、ムシヨにぶち込まれまいとする自己保身のためであろう。

嫉妬はしないと言っているのも、一見、分別があるように見えて、自分の妻に執着が無い＝愛情はないと明言しているようなものだ。

挙句の果てに、かず枝を叔父に預けて独りで東京へ帰ってしまう。

(イケメンなら、こんなムーブも赦されるのであろうか…?)

ともかくにも、このような男と情死せず、あまりあと腐れなく別れたのは、かず枝にとって良いことだと思う。

流石にこんな情死まがいの事件は、この令和の世では聞かないが、ネット心中や、老々介護の末、心中するなど自殺する人間というのは後を絶たない。

何故日本人は自殺が好きなんだろう。輪廻転生して、また生まれ変わると心のどこかで信じているからなのであろう。そりゃ異世界転生が流行るといふものだ。

キリスト教の国なら、最期の審判があるから、そうやすやすと死んでリセットなんて考えることは無い。

仮に転生があるのだとしても、魂の清らかさが無ければ、畜生道にでも落とされて、もっと惨めな思いをするだけのような気がする。

「生きていきましょうよ…… 収益化を停止されても、アゴでこき使われても、それでもじっと耐え、生きていきましょうよ……」

(おわり)

逆・檜山節考

本書『姥捨』読後の乃公、愚にもつかぬ雑感二題以下に編み出したり。

▼あらすじ:

妻の浮気を発端に、なぜか夫も含めて夫婦心中しようと死に場所を求めて水上に出向いたその道中、夫が終始ウダウダと弁明を繰り返した末に結局死にきれず、崖から転げ落ちた妻の有様に嫌気が差し離婚するに至った苦心談。

▼雑感① ～ かず枝と叔父の笑い ～:

本書は『姥捨』という物々しさ漂う表題とは裏腹におもしろ珍道中が展開されており、道中の片割れ、妻・かず枝が終始無邪気&ノープラン人間という点も珍道中の要素ではあるが、本書ラストに登場する、かず枝の叔父に関しても同様である。以下、例を挙げると、

<<「かず枝のやつ、宿の娘みたいに、夜寝るときは、亭主とおかみの間に蒲団ひかせて、のんびり寝ていた。おかしなやつだね。」と言って、首をちぢめて笑った。>> 新潮文庫[きりぎりす]所収,P.46～P.47

<<嘉七がはつきりかず枝とわかれてからも、嘉七と、なんのこだわりもなく酒をのんで遊びまわった。それでも、時おり、「かず枝も、かあいそうだね。」と思いついたようにふっと言い、嘉七は、その都度つど、心弱く、困った。>> 同著,P.47

という発言において、元夫への皮肉というよりもなんかズレてるというか、気楽なヤツだなあと私なんかは思う。で、もっと言うと、著者・太宰治は読者を笑かしにかかっている。次の引用もまた叔父に関する描写だが、<<無口な叔父は、「残念だなあ。」といかにも、残念そうにしていた。>>同著,P.46 と、これなんかは確信犯的表記であり「残念だなあと残念そうにしていた」って、もっと上手いこと言えたやろ、というアホ臭さがある。

▼雑感② ～ 嘉七の笑い ～:

先のあらすじで述べた「夫・嘉七のウダウダ弁明」も珍道中たる要素となっており、そのウダウダハイライトを 2 点紹介する。

◎1 点目:

<<「女房にあいそをつかさされて、それだからとて、— 中略 — むりもないのだ。私は、つまり、下手だったのさ。」>>

※同著,P.29～P.30

上記は文字数にして約 780 文字だが、簡単に言うと『べ、別に、オレはオマエの浮気がイヤで死ぬんじゃないでオレ自身の処世の問題で死ぬんだから勘違いしないでよねっ!』である。

◎2 点目:

<<「冗談じゃないよ。なんで私がいい子なものか。— 中略 — 意味をなさないのかも知れない。」窓は答える筈はなかった>>

※同著,P.31～P.32

上記は文字数にして約 750 文字だが、簡単に言うと『これまでオレは使命感で死んでもいいって思ってたんだけどソレって結局、犬死な気がするからなるべく死にたくないなあー』であり、それも窓に向かって、である。

といったことを考えながら、太宰治の作品は執筆背景と照らし合わせて読むよりも「単なる物語」として読んだ方が、笑える。

以上

(おわり)

『姥捨』 太宰治 感想文

何度か読んでみたが、どうもしっくり来ない。

嘉七を好きになれる。

愛していると言いながら、最後には手に負えないと、かず枝を見切って叔父に一切を頼むという、言い訳をしながらの逃げ口上に、賢い悪さを感じた。

人はこんな恥ずかしいものを持っている、とあらわに表現出来る作家は、それだけですごいのかも知れない。

二人共フワフワしていて、とても「死」の現実を実行に移す前とは思えない。床に入ってすぐ雑誌を見るかず枝には、この世から離れる実感を感じない。何事にも無頓着なのに、夫への仕返しに不埒な行為に陥ったのだとすれば、愛しているのはかず枝の方であると感じた。

映画館で手を重ねる部分は、嘉七のうそぶく姿のようで、ぞっとしてしまった。

「世話になった」という言葉は、妻であれば許せない。女性として魅力のない証明のような表現であり、これもまた言い訳に聞こえてしまう。

この作品は、太宰先生の実話であれば、尚、読み手に正直に惨めさが伝わってしまい、心の嘘も読者が理解してしまうとすると、それを恥ずかしみもなく伝えてしまうのが作品の魅力なのかも知れない。

しかし最後まで、嘉七という人間が嫌だった。

(引用はじめ)

「ああ、もういやだ。この女は、おれには重すぎる。いいひとだが俺の手にあまる。おれは無力の人間だ。おれは一生、このひとのために、こんな苦勞をしなければ、ならぬのか。いやだ、もういやだ。わかれよう。おれは、おれのちからで、つくせるところまで尽くした。

その時はっきり決心がついた。

この女はだめだ。おれにだけ、無際限にたよっている」(新潮文庫 P.44)

(引用おわり)

また別の女性に逃げていく口実、理由、言い訳に聞こえてしまった。

人に頼って生きたい人間が、頼られる重さに耐えられないという表現に思えて仕方がない。

そして、女性として自立した人とやがて心中してしまったのか。

「姥捨」とは嘉七のことだったのではないかと感じた。

(おわり)

Uber STAY

確かデュルケームの「自殺論」と言う著書に、こんなことをしたら死んでしまう、とわかっているのにその行為をしてしまうのはあらゆる動物の中で人間だけだとありました。

大量の睡眠薬を飲んだところで嘔吐するか、そのうち眠りから覚めてしまうのが実際でしょうが、これをやったら死んじゃうよ。という事をわかっている決行したのだから、当作品に出てきたお二人とも間違いなく人間なのでありますね。

話が脇道にそれますが、死ぬ場所を求め何日も飲まず食わずで山の中を彷徨い歩き体に傷を作り、そこにバイ菌が入って感染を起こし、寒さで体力が落ちているところで睡眠薬を多量に飲んで意識が朦朧とした状態で斜面を転げ落ち、頭を岩などにぶつけ亡くなった場合は天の神様や閻魔様は自殺をした不屈き者と判定してくれるのでしょうか？もし鑑識が必要ならこの世から科捜研の男女やガリレオと呼ばれた変わり者の科学者をこの世からお届けしましょう。実に興味深い。

さて、私の周りにはいらっやらないのですが、年齢が若く五体満足な方で死にたい死にたいと常日頃から思っている方がこの世にはいるそうですね。

そういった方々の声に耳を傾け寄り添うだなんて私にはとてもできそうにありません。

「は？ お前人がこんな悩んでのに何意味わかんねえことぶっこいてんの？ 頭割れてるの？」と言われてしまいそうですが、死にたいと思っている方は自分が死んだらその魂や精神や意志といったものはどうなるか、考えたことがあるのかな？ なんて考えたりしています。

もし魂や意志みたいなものがあるとしたら、それは永遠に残ると思いますが？ 魂や意志が永遠に残るなら、死にたいと言う想いも肉体を離れた後でも消し去れないのでしょうか。なら自ら肉体の生命を絶つ意味はありますか？ さらに夏目漱石の門に出てくる話じゃないけれど、自分が生まれる前、自分の両親さえも生まれていなかった時、自分の魂や意志はどんな状態で、どこで何をしていたらうか？

RADWIMPS の「有心論」に出てきた『2 秒前までの自殺志願者を永久幸福論者に』変えてくれた「君」みたような事は私はできないので、上記の問いは自分にたてて、自ら命を落とすことかないよう死ぬまで生きていたいと思いました。

最後に、作品の最後に出てきたかず枝の叔父の活躍をもっと見てみたかったです。

かず枝をネタにして嘉七の所に事あるごとにやってきては酒を奢らせたり、金をせびってくる姿を見たかった。皆さんはいかがですか？ 以上

(おわり)

「愛ゆえに」

(引用はじめ)

おれは、この女を愛している。どうしていいか、わからないほど愛している。そいつが、おれの苦悩のはじまりなんだ。けれども、もう、いい。おれは、愛しながら遠ざかり得る、何かしら強さを得た。生きて行くためには、愛をさえ犠牲にしなればならぬ。

(引用おわり)

愛するということは、信じることに他ならない。信じることは容易なことではない。疑い出すとキリがなりが、信じるには長いこと信頼関係を築き、強い信頼関係で結ばれていなければならない。かず枝は不倫を犯した、そこにもう信頼は生まれ得ない。

しかし嘉七はそもそもかず枝のことを信じようとも、愛してもいないのではないだろうか。遠ざかりながら愛すると言った途端、愛を犠牲にして「生きる」と言っている。それはまるで、愛していたから「死ぬ」と決意したと遠回しで弁解しているように見える。彼は信じることを死で避けようとしたのではないか。

(引用はじめ)

ああ、もういやだ。この女は、おれには重すぎる。いいひとだが、おれの手にあまる。おれは、無力の人間だ。おれは一生、このひとのために、こんな苦勞をしなれば、ならぬのか。いやだ、もういやだ。わかれよう。おれは、おれのちからで、尽せるところまで尽した。

そのとき、はっきり決心がついた。

この女は、だめだ。おれにだけ、無際限にたよっている。ひとから、なんと言われたっていい。おれは、この女とわかれる。

(引用おわり)

本当に愛しているのならば、妻から頼られることを「重い」と思うのだろうか。愛している相手に頼られるのがプレッシャーで距離を置きたくなって、遠くで見守るくらいで安心するだけなのならば、それは愛ではないと思う。愛には責任が伴う。不倫を犯した妻をそれでも「愛している」と決めているのなら、妻を信じて「愛しながら生きる」ことを選ぶべきだ。

心中を図ったことも、生き返って「別れ」を決心したことも、結局逃げていいることに等しい。愛はお互いハッピーになるために存在することだと思う。愛を装って死を語ったり、自分の自己愛をカモフラージュすることからは、相手への関心も、集中も何も感じられない。

(おわり)

俺とキリストと大五郎

心中しようと群馬の温泉地に行く夫婦の道中は、薬品大量購入以外は健康的なデートのようだった。どのような夫の行動があつて妻が不貞したのかその話は具体的には出てこない。

わかるのは、夫の嘉七は、妻の不貞を責めるより、自分を責めていたことだ。

不貞をしたのは妻のかず枝であるが、妻にはそうせざるをえない理由があつたのであり、自分がそこまで妻を追いやめた張本人だと嘉七は自覚している。それで自分を責めていた。

かず枝を不貞に走らせるほどの行動とは、芸術家の嘉七が、〈歴史的悪役を買ってでよう〉とし、行き過ぎたようである。また、過去に〈女たらし〉の異名を与えられていたので、嘉七は嘉七で不貞があつたのかもしれない。直近で読んだ『鷗』と、嘉七の卑屈なモノローグはよく似ていた。

(引用はじめ)

ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す。私は自身を滅亡する人種だと思っていた。私の世界観がそう教えたのだ。強烈なアンチテゼを試みた。

(引用おわり)

自らをユダに喩えるのが大仰だが裏切り行為の結果、かず枝は他の男性のもとに走つたのだろう。

世間様の規範は律法学者の主張のように、一部の人を苦しめる。イエスは規範からはみ出して虐げられた人や悪鬼につかれた女を引連れてよく一緒に行動していた。学者を諷めるイエスの発言を読んだとき、嘉七は罪悪感から解放されたのだろうか。

ドストエフスキーの『罪と罰』に出てくるマルメラードフを私は思い出した。10代の自分の娘が売春して得たお金で飲んだくれ、最期は馬車に飛び込み亡くなる。やはり自分を責めながら依存症に苦しみ、底辺の安酒場で見ず知らずの学生に絡み、裁きの時が来たら、飲んだくれも天の国へ呼ばれるのだと豪語して安酒場のメンバーから罵声を浴びる人である。

嘉七は、薬にもかずえにも依存していた。頼っていたのはお互い様なわけで、つまり二人は共依存関係にあつたのだから、別れは辛いだろうが間違いではない。心中未遂の後、2人は別れる。

ところが、嘉七は別れてからもかず枝の叔父さんとは飲みに行っていた。

(引用はじめ)

この叔父は、いいひとだった。嘉七がはっきりかず枝とわかれてからも、嘉七と、なんのこだわりもなく酒をのんで遊びまわった。それでも、時おり、

「かず枝も、かあいそうだね。」

と思い出したようにふっと言い、嘉七は、その都度、心弱く、困った。

(引用おわり)

嘉七はかず枝の話を間接的に聞いて、やはり自分を責めていた。

(おわり)

「配偶者に間違いがあった場合どうするか問題」

(引用はじめ)

「あとは、かず枝の叔父に事情を打ち明けて一切をたのんだ。無口な叔父は、『残念だなあ。』

といかにも、残念そうにしていた。

叔父がかず枝を連れてかえって、叔父の家に引きとり、

『かず枝のやつ、宿の娘みたいに、夜寝るときは、亭主とおかみの間に蒲団ひかせて、のんびり寝ていた。おかしなやつだね。』と言って、首をちぢめて笑った。他には、何も言わなかった。

この叔父は、いいひとだった。嘉七がはつきりかず枝とわかれてからも、嘉七と、なんのこだわりもなく酒をのんで遊びまわった。それでも、時おり、

『かず枝も、かあいそうだね。』

と思いついたようにふっと言い、嘉七は、その都度、心弱く、困った。」

(太宰治「姥捨」 青空文庫)

(引用おわり)

引用した部分は小山初代の叔父、吉沢祐五郎の事を書いたのだと思うが、この部分がやはり、小説全体に非常に良い効果を与えている。

このような仕掛けを使って小説に癒しと哀愁の効果を与えている真意は、本作は実のところかなり深刻な問題を語っているからである。

それが「配偶者に間違いがあった場合どうするか問題」(以下「配偶者間違い問題」と省略して表記する)で太宰治の主要テーマの一つである。

太宰の場合は「女の人のいない国に行きたい」「人間失格」になっても仕方がないじゃないか、となる。

太宰の主張に対し「そのような間違いは誰にでもある事で、それに固執することで家庭全体が不幸になることはつまらない事だから、赦すもしくは忘れるのがよい」という意見の小説が実は日本文学の中に結構沢山ある。

その反太宰小説のいちいちをここに挙げると、これからの読書が面白くなる可能性があるのではない。

反太宰派の中には実際に「配偶者に間違い」があった作家もいるが、

そういう事実が無くて理想を語っているように見える著者もいる。

この理想を語っているだけの小説家に対する懐疑が、

太宰の日本文壇に対する怒りの一つである。

よくよく考えれば「配偶者間違い問題」は日本文学だけでなく、

世界文学にもそれを取り扱ったものが多くあるし、映画やドラマにもかなりある。

さらに各国の文化や事情によって「何が問題なのか」「何が悪いのか」がいろいろ違う。

または「どこから間違いになるか」についても、それぞれの考えがあるうえに、

「本当のところ誰が間違いの元凶なのか」などに発展していくのである。

(おわり)

『姥捨』 感想文

ひどい話だなと思いました。

題名もなかなか酷くて、酷い感じを隠すのではなくて、全面に出す感じが、酷い話だと思われたいのかなと思いました。

妻のかず枝の浮気が許せないので離婚したい。妻の浮気を許せるほど器が大きくないという事をあまり目立たないように、しているのかなと思いました。

確にかず枝は何かやっかいな感じもするので、一緒にいるのが疲れたのかもしれない。嘉七はすごく意気地なしたなと思いますが、殺したり、心中したりして終わらせるのではなく、なんとなく白黒はっきりさせない感じが良いのかもしれないなとも思いました。

かず枝は気の毒な感じもするけど、いつまでも子供みたいな所があるから嘉七にとっては手に余る所があったのかなと思いました。

悪い人じゃないんだけど一緒にいると疲れる的な事なのかな？

一緒に居ないほうが良い二人だったのかもしれないから、かず枝もこの先幸せになればいいなと思いました。

(おわり)

『優しい人間、心の弱い人間のウソ』

生きるのを意欲しなくなることはあっても、生きようとする意志は否定できない、ということをショウペンハウエルが『自殺について』で述べていた。(『自殺について』岩波文庫 P.84)

妻の不倫を目撃し、借金を重ね、生活に困難を感じて、この主人公は夫婦で心中しようと思いつく。妻の不倫を目撃してしまったショックというのは『東京百景』や『人間失格』にも描かれている。この『姥捨』には、不倫した妻と心中しようとして、果たせず、別れるまでの経緯が書かれている。

狂言自殺という言葉があるが、自分が悪者にならない程度に別れるきっかけが欲しかったので、心中を図ったというが、この『姥捨』の主人公の企みなのではないかと思った。これは、世間への言い訳の果ての心中未遂である。

この主人公は、倫理的に妻を非難して、一方的に別れるほど立派な人格者ではないことを自覚している。だから、妻を責めずに、一緒に死ぬことを提案する。この思考回路は、わからなくてもいい。

この主人公は、優しい人間でありたいのだろう。そして、本当は自分は、優しくないということも自覚していると思う。優しくすうけど、ほんとは優しい人間ではないと、世間に見抜かれるのを恐れているのだろう。自分を優しい人間にみせたいというのは、エゴイズムである。虚栄心やプライドの一種である。

優しい人間にみられたいムーブと、それにまつわる自己嫌悪が全編に漂っている。

この主人公には、生活の困難に立ち向かう強さが必要だ。そのことも、本人は、はっきり自覚しているのだろう。しかし、生活の困難に耐えることができないほど、弱いのである。弱いというのは、生きることに困難を感じるまで追い詰められると、生きようとする意欲がなくなるとのことだ。

そして、心中に失敗するというは、ショウペンハウエルの言う通り、人間には、生きようとする意志をそのものは、否定できないということだ。

世間を渡っていくには、生活に押しつぶされても、耐えていかなければいけず、そのために、自分のエゴで世間を渡っていくような、浅ましさが、必要であり、それはケダモノじみた浅ましさである。

そんな当たり前のこと、誰かに教わるまでもないのだろうが、それができない優しい人間、心の弱い人間は、この作品にシンパシーを感じるだろう。そのためにウソをつく。優しい人間の、弱さからでるウソを。

私も、もうとっくに太宰の死んだ年を越えている。太宰がもがいていたことの一部が、身につまされるように理解できるようになったのは、恥ずかしながら、最近である。生きるのは大変だ。ウソでもつかなければ生きていられない。

『ワーニャ伯父さん』のソーニャではないが、それでも、人間は、生きていかなければならない。みっともないエゴだろうがなんだろうが、とにかく世間に自分を押し立てて、渡っていかなければならない。それが死ぬまで続くのが、人間の宿命であり、ときに生活に押しつぶされ、生きようとするのが意欲できなくなり、生活を投げ出しても、その宿命そのものは、人間であるための本質から離れないのである。

優しい人間は、その宿命につきまとう、ケダモノじみた浅ましさをうけいられられないし、弱い人間は、その浅ましさからくる自己嫌悪を引き受けて、生活の困難に立ち向かうのを避けようとする。でも、生きようとする意志は否定できない。

死にたいなんてウソである。生きるのを意欲しなくなっただけのことだ。

(おわり)